

# 関山

かんざん

創刊号



寺報 中尊寺



目次

中尊寺の法灯	貫首 千田 孝信	2
不動明王	菅野 澄順	4
慈覚大師像を彫る	西村 公朝	7
楸邸と「みちのく」	加藤瑠璃子	11
能「鳥頭」	佐々木邦世	14
——滝井耕作の短篇に寄せて——		
親と、子と、家族	菅原 光中	19
人生の節目の		
観音めぐり取材行	小池 平和	22
関山植物誌	清水 秀澄	25
園僧正の想い出	佐々木賢有	26
中尊寺の延年	破石 澄元	28
和 楽	八重隆貞子	30
風信／語録		31

中尊寺公刊案内 33

中尊寺御遺体学術調査  
《最終報告書》

図書便覧

執務日誌 36

# 中尊寺の法灯

貫首 千田孝信

当山は嘉祥三（八五〇）年、慈覚大師円仁によって開基された。たとえ史実では、大師の高弟が大師の尊霊を勧請して開かれたにせよ、拜む者として、この寺伝をわたくしは信じ、そして誇りに思う。下野出身の大師はみちのくの民衆にことさら深い思い入れをお持ちだった。

散位藤原経清公が、名門藤原秀郷出自の貴族身分でありながら、安倍一門の娘を娶って土着しようとしたみちのくへの愛情を、わたしは切実な思いをもって共感する。在庁官人としてであれ、政治は、その地域の土と血と心への愛情なくしては成り立たないことを、公は直観されたのに違いない。

初代清衡公が、その前半生の苦渋にみちた人生体験からの懺悔解脱として、慈覚大師由緒の霊蹟にあやかって中尊寺を建立し、敵味方の差別なく毛羽鱗介をも含む冤霊の救済と、みちのくの辺地の一角、この平泉から、五畿七道に向って鎮護国家の大願を発された志の高さにわたくしは打たれる。名づけて中尊寺。単にみちのくの中心という意味を超えて、辺境にあっても法界・宇宙の中心であろうとする矜持と悲願に満ちたものだった。

二代基衡公が、再び安倍一門の血を入れて、みちのくの土と血と心への忠誠

をしめしながら、大浄土庭園を開いて吾朝無双の円隆寺（毛越寺）を建立した豪壮な志は、つねに地方の土着的なるものへの求心的志向と、逆に、地方にあっても第一級の中央文化を憧憬する遠心的志向を合わせ持つ、藤原歴代の生き方の典型であった。

三代秀衡公が、二代に亘るみちのくの血を入れた文字通りの「北方の王者」として、新たに政庁・平泉館を設け、平等院を凌ぐ無量光院を開き、奥六郡を含む全みちのくの鎮守府大將軍として、頼朝をすら畏怖せしめた堂々たる王者の風格は、みちのくの高い誇りであった。祖父清衡公の幼時に似た義経への慈愛は、頼朝の人格をはるかに超える王者の仁慈であったといえよう。

四代泰衡公の担った悲劇を、誰が責めることができようか。今や、金色堂に莊嚴に祈りこめられた仏心の世界が、人間世界の善悪の彼岸・恩讐の彼方に立って、慈愛と宥恕のほほえみを湛えているのである。

延暦七（七八八）年、宗祖伝教大師最澄が比叡山一乗止観院に点された不滅の法灯が、昭和三十三（一九五八）年、当寺に分灯され、当山は天台宗東北大本山の呼称を許された。

伝教大師・慈覚大師相伝の法灯を伝える関山中尊寺は、まさに、みちのくの人々の心の原点として、今後みちのくに、参詣する人々に、高い志と希望と勇気の灯・法のともしびを掲げてゆきたいと念じている。

# 不動明王

## 菅野澄順

不動明王 何者だ  
色は黒くて二眼はがちゃ目  
齒をむき出して口を曲げ  
忿怒の形相おそろしく  
右手に劍を引つ立てて  
左の手には繩を執り  
姿に似合わぬ蓮華の花を  
頭の上にちょこんと乗せて  
岩石の上に仁王立ち  
世の中、人々各々は  
自分自身が仏です  
この事 みんな解かってない  
そこで不動は思案した  
自分独りが覚瘡の味を

楽しむ訳にはいかないと  
悩み苦しむ もだえる人  
他人の事など無頓着  
高慢無礼の輩や  
易きに染り精進を忘れ  
自分自身を過信する  
力も無いのに勘違い  
優しくすればつけ上り  
人の道さえ踏みはずし  
はずれた事さえ気が付かない  
そこで瞋怒を現して  
過ち直し矯正し  
仏の道を差し示す  
外は忿怒の相でも  
内に大慈悲満ちあふれ  
人々視る眼は平等に  
親が子を視る眼に同じ  
善人悪人隔て無く  
救うことを誓願し

東奔西走するうちに  
塵や埃にまみれても  
体を洗うひまがない  
左右天地の眼くぼりは  
二つの眼球を別々に  
廻らさないと間に合わず  
目を休ませるひまがない  
ちよつとやさつとじゃ救えない  
齒をくいしばる永い歲月  
口もへの字にひん曲がる  
切れ味するどい右手の劍は  
我利我利亡者を一旋し  
邪心悪性切り殺し  
死んでしまったその後は  
仏心磨いて蘇生させ  
正しい道に進ませる  
左手五色のこの繩は  
救助を求める人有れば  
搦めて引つ張り救い上げ

頭の上のこの花は  
極楽世界へ人々を  
運ぶための台です  
立ってる岩石は硬くて重く  
仏の道から退却しない  
不動の決意を表示する  
不動明王住所無し  
強いて住所を問うならば  
人々みんなの心の中  
その一念が住处です  
自分自身の愚かさに  
みんなが疾く気がつけば  
不動はみんなの下僕となって  
正しい道行き手助けします  
以清浄心 仏道回向  
善願成弁 決定円満  
現世当生そのままに  
浄安楽国へ運びます



開山慈覺大師坐像 (昭和)

此是當山開祖慈覺大師尊像也  
 昭和三十六年三月 徐中尊寺請文部省  
 文化財保護委員會 派遣在京師國空佛  
 理所長技師西村公朝氏 修理金色堂內  
 各佛像 兼而一山執行圓衆院佐々木實  
 高 慶無住菩薩塔燒失以來開山堂係開  
 山像 恰正當大禮越藤原清初代公御  
 生誕九百年 靈感至彼頃前記公朝氏乞  
 剎大師御像事 氏欣諾精進澤添於山內  
 蹟衝葺蓮作託寄 時于昭和三十六年三  
 月春分之日也  
 桂材貞觀様式一木式彫古色仕立座像  
 御丈 二尺二寸四分  
 昭和三十六年三月  
 中尊寺住職 蘭實圓誌

同 胎内銘記



(画像不動明王 京都醍醐寺)

生きる限りは過去現在  
 数多の罪を造り出す  
 これが人の定めなら  
 不動明王 日夜に念じ  
 威力を憑み罪障消滅  
 身体と言語と意をもって  
 不動明王敬礼し  
 常に明王念ずれば  
 必ず仏道円満し

心安穩樂が得られます  
 不動念する人々に  
 仏の力が加わって  
 人は力を堅持して  
 即身成仏叶います  
 假令 悟らぬ未成の身でも  
 我が師 我が父母 我が兄弟  
 有縁無縁の人々と  
 更には動物植物までも  
 一切平等利益して  
 成仏祈るその相  
 祈念意の崇高さよ  
 この一念が因となり  
 大聖不動を縁として  
 阿耨菩提は成就する  
 婦命頂礼 大聖大悲  
 忿怒明王 不動使者

(真珠院住職)

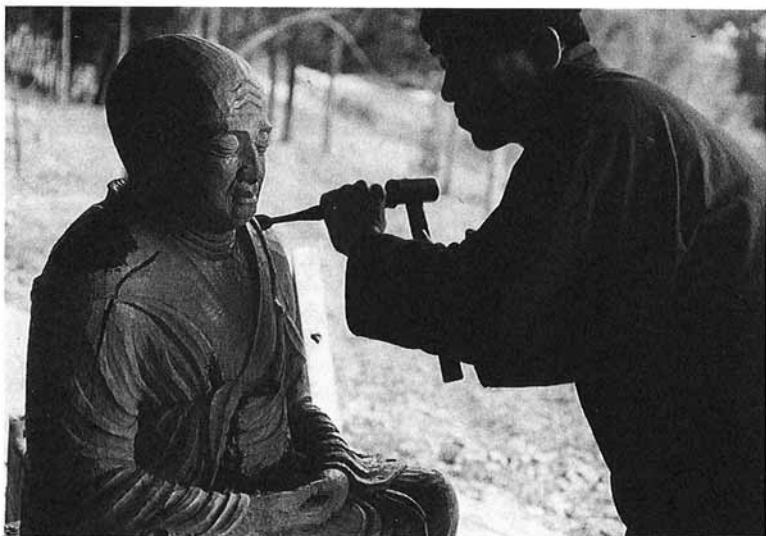
# 「慈覚大師像を彫る」

西村公朝

今年、慈覚大師御生誕千二百年の記念すべき年として、天台宗寺院では、いろいろの慶讃行事を厳修している。その中で、私にとって生涯忘れることのできないうれしいできごとに、一人、そのよろこびを味わっている。それは、中尊寺の開山堂に安置されている慈覚大師像についてのことである。

中尊寺では、金色堂安置諸仏の修理事業が、昭和三十五年、国の予算に組み入れられ、三十六年一月八日に着工、三月末日に完成した。この工事は、美術院国宝修理所（現・財団法人美術院）の所長であった私が、その責任者として、所員五名と共に中尊寺の宿坊に泊り込んでの仕事である。この期間、雪の中尊寺は、景色的には美しいが、寒さの点では、漆や金箔を大量に使うわれわれ技術者には、大変な苦行でもあった。それに加えて、

同県内・黒石寺の慈覚大師像と伝えられる僧形像と、愛宕神社の兜跋毘沙門天像が虫蝕朽損部の修理として、中尊寺工房に運び込まれた。寒い中尊寺で、大量の仏像に囲まれ、忙しい毎日であった。工事もいよいよ完成に近づき、あと残り二週間程となったある日、当時の執事長佐々木実高師から思いがけない大仕事を持ち込まれた。それは、当山には開山堂があるが、いつの頃から開山慈覚大師の像が無くなっている。大師像を造ってほしい、ということである。執事長さんとしては、今すぐにといているわけではない。だが私たちには、次々と工事予定が決められている。それに所長である私は、他の工事現場にも監督に回らねばならない。こんなことで、一瞬返答に困ったが、この話は、天台宗に僧籍をおく私にとっては、誠にありがたいことであり、また私の作品が、開山堂に祀られるということは、何よりの光栄であり、名誉なことである。十日間夜を徹すれば、なんとかなるだろうとお引受けした。その翌日、水沢市の材木屋で桂材を買い、次の日から寄木造りとして



の木工工事にかかり、三日目に荒彫りを開始した。

さて、その制作にあたっての、私の造形的考え方を述べておきたい。

そもそも慈覚大師（七七四―八六四）像と伝えられるものには、絵画では、兵庫の一乗寺に平安時代（十一世紀）のものが最も古いのであるが、彫刻では古像が現存していない。しかし伝えとしては、所々でみることができると。その一例が黒石寺の像（永承二年・一〇四七）であるが、これも現実的には、僧形八幡神像というべきものである。このように、彫像としての古い作例は、誠に少ないのであるが、幸い、慈覚大師の頭部と伝えられる木造が立石寺に祀られている。これは貞観六年（八六四）正月十四日入滅された頃の制作と伝えられ、大師の肖像としては最も古いものである。私は執事長さんから制作を依頼されたとき、一瞬、この立石寺の頭部と黒石寺の像と一乗寺の三像が、私の頭の中で形として組み立てられた。

それにしても、慈覚大師は何歳位にこの地に巡錫し、中尊寺の開基とされたのであろうか。東北地方の巡錫は、資料的には天長年間、大師の三

十数歳頃である。しかし、その後の巡錫については確証がなく、その事実は不明である。でもこの東北では、大師の巡錫・開基・中興といわれる寺院が百数十カ寺以上もある。これらのことから、中尊寺もこの頃と考えれば、年令的には五十代半ばとなる。また、黒石寺の像容は、伝えではあるが、これを史実とすれば、いかにも健全で若々しい初期巡錫時の頃にもみえる。この像容を参考とし、立石寺の頭部（七十歳位）を、五十歳に若返らせれば、正に中尊寺を初めとする東北地方の開基時にふさわしい像となるであろう。

また、大師の入滅は貞観年間である。この頃の仏像は、平安前期の彫刻様式として弘仁様式・貞観様式といって、刀痕力強く、衣のひだの造形にも翻波式といわれる彫法が、大きな時代様式とされている。私は、この開山像の彫法を、総て貞観様式にしよう。幸いにも、伝えであっても、現存で最も古いとされている黒石寺の像が、今、この中尊寺工房に來ている。しかも私たちが、目下修理中として、毎日手に触れている。これこそ正に

深い仏縁といえよう。

私の心は、この制作に燃え、所員たちの助力も得て、七日間で荒い彫りではあるが彫りあげた。まだ、二・三日は余裕がある。素地彫りだけではなんとなく淋しい。やはり彩色仕上げにしよう。この古色付けは、私たち国宝修理所の秘伝であり、誰にもできない技法である。

私たちは、予定通り三月末日に中尊寺を引上げ、次の工事場へと移動した。五月には、開山堂で盛大な開眼法要が厳修された。

私は他県への出張でお詣りができなかった。

それから半年ほど過ぎたある日、私は上野駅のホームで、意外なポスターを見た。それは、国鉄が中尊寺への旅をすすめるものであるが、なんと、私の彫ったあの慈覚大師像の写真である。衣のひだにも翻波式があり、古色の彩色も各所に剝落して、いかにも古仏にみえた。実にうれしかった。あれから、もう三十年以上にもなる。今は亡き佐々木実高師の、あの時の笑顔を想い出す。心からご冥福を祈る。

（京都 愛宕念仏寺住職）

## 楸邨と「みちのく」

加藤 瑠璃子

父（加藤楸邨）は平成五年七月三日、八十八歳で亡くなった。本名健雄。生れたのは明治三十八年五月二十六日、日露戦争の日本海海戦の前夜（父は良くそういつていた）、出生届は山梨県の大月市に出している。父親が鉄道に奉職していたので転勤が多く、両親（父健吉、母千佳）は東京で結婚、大月に転勤している。後、東京の国分寺（小学校入学）、静岡県の御殿場、福島県原ノ町（小学校卒業）、岩手県の一ノ関（中学校入学）、新潟県の新発田の駅長を転任し、退職後母親の郷里である石川県の金沢（中学校卒業）へ転居。

どこも二年から三年で移転しているので、その度に学校が変わり、一ノ関中学へ入学した時も、小学校からの友人が一人もいない、転校生のような新入生だった。それで学校から帰ると自然に足が外へ向き、中尊寺、毛越寺、達谷の窟、北上川、

衣川の柵、巖美溪、束稲山など、最初は一人で後には友人と、名所旧跡といわれる所をできるだけ広範囲に歩いてまわっている。特に多く行ったのが高館で、長時間腰を下ろして北上川や束稲山を眺めているのが好きだったとか。また一番心に残っているのは達谷の窟で、遠くからにらみつけるように見える巨大な磨崖仏と、百八体あるという古い仏像を安置した、怖れさえないだかせる毘沙門堂が、忘れられないらしかった。お金を入れると川向うからやってくる、巖美溪の団子の話も何回聞いたかわからない。

父は書屋号を達谷山房とつけ、そう署名した手紙や書がかなり残っている。それをみてみてもいかに一ノ関周辺が父の中に、深く入りこんでいたかわかる。蝦夷の賊の頭で悪逆無道な悪路王の話も、少年の折何人かに聞き、父の中に住み続けた。それが『続日本紀』によると、中央政府によってしだいに侵攻された、蝦夷の最後の抵抗者だったことを知り、安倍氏から続いた藤原氏の栄華もそうだが、『奥の細道』という、芭蕉のそののみ

のように考えがちなのが、人々の知られざる生活の上にとった「みちのく」があるのではないかと父は考えた。父の随筆に

「私は今つくづくと私の歩いている一本の道のうえに、ここに血をもって相争われたもの、埋没に瀕しつづ、この達谷の窟のようにもし努めて探りとうとするなら、人のなまなましく生きぬこうとしたもうひとつの「みちのく」があり、もうひとつの「おくのほそ道」があることをしつかりと見てとりたいたいものと思う」

「私は今、机の前にひとつのもののしずかな弥生の壺をながめている。まことに静かで穏かな農耕民族にふさわしい生活の象徴だと考えている。しかし、一度目を細めて見ると、この弥生式の壺の彼方にはるかおしやられていった、もうひとつの「みちのくびと」のかなしみが縷縷と細音をつづる邯鄲あなのようにどこから聞えてくるような気がして仕方がないのである。

邯鄲やみちのおくなる一挽歌 楸邨

以上は昭和五十二年に平凡社から出た『太陽コレクション「地図」・4』に「もうひとつのみちのく」という題で書いた最後の方の部分で、句はすべてを総括するように、最後に置かれている。私には「もうひとつのみちのくびと」への挨拶の句のように思える。

この文章と句をご覧になった佐々木邦世様が是非句碑にとおっしゃったが、句碑ぎらいの父はうんといわない。何度も足を運んで下さり、非常にご迷惑をおかけしたことを、ここにお詫び致します。建てるに当たっては、東稲山の自然石で、参道では無い所に建てたいという父の希望を、受け入れて下さり、石は東稲山にあった自然石、場所は東稲山と達谷の窟を遥かに望み、中尊寺と毛越寺を結ぶ山の中。自然石は六十五トンもある巨石、牛がつぐんでいるようにも、鯨が陸へ上ったようにも見え、単なる石ではない懐かしさが感じられ、私など父の骨がそこには無いのに、まるで父の墓のように思え、そこに父が居るような気がしてしまふ。帰ってくる時など、父に「おーい帰ってし

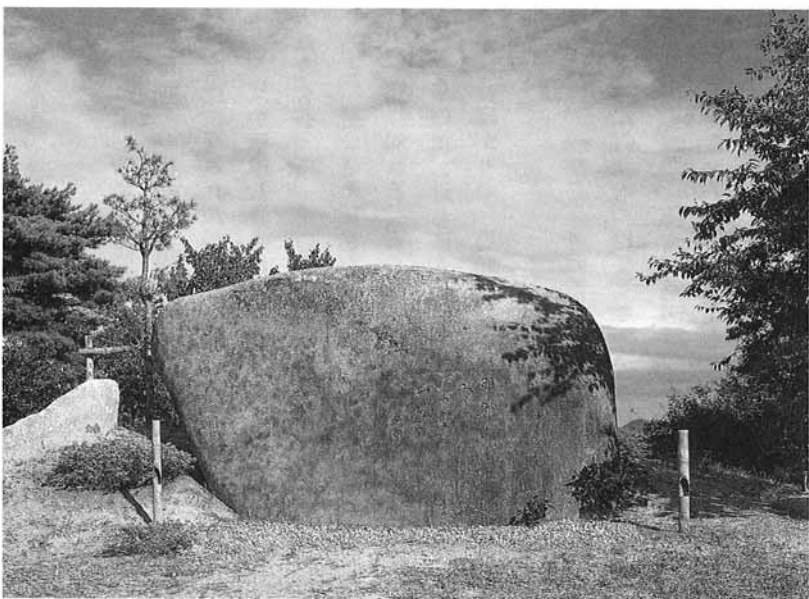
まうのかい」と呼びかけられているような気がし、「また来ますからね」と心の中で答え、涙が出そうになる。

みちのくの真夏真冬を句碑は耐え 瑠璃子

それでこんな句が出来てしまった。

父は目をつむると北上川や東稲山が浮んでくるといったが、私は目をつむると父の雄大な句碑が浮んでくる。句碑の字は消えてしまっても、石に托した人の心は石と共に未来永劫に残っていくことと思う。

〔寒書〕編集同人





# 能「烏頭」

——滝井耕作の短編に寄せて——

佐々木邦世

へ安き隙なき 身の苦しみを 助けてたべや御僧：  
演能中にサーッときた時雨にも、見所はだれひとり動  
かなかつた。すべての人が、シテの一点を凝視していた。  
わたしは、その舞台から逆に、見所を正視していたのであ  
る。シテの亡者が視界を斜めに過った。

その記憶は、数片の変色した写真から蘇ってきた。烏頭  
の後シテ、先々代御宗家喜多六平太翁の舞台である。写真  
は父が晩年、母に整理させたアルバムに貼られてあった。  
兄がその写真を見て、「親は空にて血の涙を……と、こう見  
上げるところだね……。この舞台に、お前が後見で出ていた  
んだよ」。いともさり気なくそう言った。まさか、アルバ  
ムのページを繰って、もう一枚の写真に目を近づけた。舞  
台鏡ノ松の前に袈姿で座っている、それが自分であること

る。徳んさんは、ほとんど「徳んツァン」と汚く訛って聴  
こえた。わが家の前の街道をなぜか下道といった。その下  
道を奥にしばらく行った在所の、農家の親方で、表の仕事  
についたようなこともなかったし、無論、謡など習ってい  
たわけでもない。ただ「安き／隙なき……」と繰り返すあの  
ときの徳んさんは、烏頭のシテ役になりきっているようだ  
った。

「お姥ンさん。いや、よがしたッ、お能オ」

奥の炉辺でひとり留守していた祖母に向かって、脇の土  
間から、徳んさんが挨拶した。

「……………そうかい」

祖母は、一言そう言っただけで、緩りと伏せてあった湯  
呑み茶碗を反して茶を注ぎ、徳んさんの方に黙って出した。  
さっきの時雨で舞台の方は大丈夫だったかい、とか訊いて  
くれれば徳んさんも話がつながるのに……と思ったが、お  
能など観てあんた達に解かるのかい、とでも言いたいよう  
な気配である。まして東京の御宗家の舞台を見て「好かし  
た」などと……。亡くなった祖母は、時折そういう気分を、

がわかると途端に、何十年か前のその日の光景が一コマ一  
コマ浮かんできた。わたしが九歳のときの、その日である。

楽屋にもどって袈を脱ぐと、わたしは大人の世界から外  
された。その日の宗家能がすべて終わって、子方を勤めた  
兄は楽屋に残されたが、わたしは「先に帰ってなさい」と  
一言、父から申し渡されてしまった。男は帽子を被り、婦  
人は身を装って、その人波から置き去られたように佇って  
いると、徳んさんが私を見つけて近づいてきてくれた。家  
まで一緒に帰れる、安心して私は徳んさんの後ろに黙って  
従って歩いた。近くに人かけが無くなると、徳んさんはい  
ま聴いたばかりの「烏頭」のキリのところを、口真似て謡  
った。

へ安き／隙なき／身の苦しみを

ことさらに抑揚をつけて、徳んさんはくりかえした。家に  
着くまで、ずうっと私ひとりが聞き役になっていた。

謡の意味などわからずはすまないが、ただ何か「のり」  
のようなものを感じて、謡の節回しに従っていた。

徳治の名の後に様かくると「ン」とつき「ツァン」とつま

あからさまにみせる癖があった。

徳んさんは、出された茶碗を推し戴いてから、帰った。

喜多流宗家一門を招聘して、中尊寺の能楽堂に「烏頭」  
が演じられたのは、新作能「秀衡」初演披露の折であるか  
ら、昭和二十六年十一月のことであった。翌年、『群像』  
八月号に、滝井耕作がその日の舞台を活写して、随筆「松  
島秋色」と題して載せている。

時間がおくられて、「烏頭」が始まった。烏頭は六平  
太さんの十八番で、私はこんどは三度目だが、又みた  
くて茲までついて来たので。今日は、喜多実さんが地  
頭。囃子方も袈姿。ワキ諸国一見の僧が出て、「陸奥  
外ノ浜をまだ見ないから。路の序に越中立山にも登っ  
てみたい」と述べ、そして立山の地獄を見て、そのけ  
しきを謡ふ。其時、橋掛の揚幕が上り、六平太さん  
のシテ亡者が現れる。笑尉ノ面、焦茶水衣、藍無地熨  
斗目。亡者は揚幕の前から、舞台のワキ僧に呼かける。  
そして、「御僧がみちのくに行かれるならば、外ノ浜



の猟師の宿に言伝てをたのみたい。猟師は去年の秋死んだもので、其の妻や子の宿をお尋ね下されて、宿に有る養笠を手向けてくれよ、と言きかせて下され」と頼む。

鳥は子を砂のなかに隠し育て、餌を運び来て「ウトウ」と呼ぶと、子鳥が「ヤスカタ」と応えて出てきて餌を食む、という。人間に、その習性が知られたとき、鳥頭にとっても人間にとっても悲劇がはじまった。

猟人が、母鳥の声をまねて「ウトウ」と呼べば、子鳥は母と思って「ヤスカタ」と声をたてて出てきて捕らえられてしまう。母鳥は血の涙を流した。赤い涙に濡れると猟人は身を害したという。

また云う。ウトウは打追うの心ならん。鳥さえ親子の情は深く血の涙に叫んで命を惜しむに、夷狄にはその心なしと。定家の詠める歌、

みちのくの卒都の浜なる呼子鳥

鳴くなる声は うたふやすかた

社会基盤が斜陽になっても、かれら王朝文芸のなかには「あづま」や「えびす」に対する蔑視があらさまにみられる。都びとにとって、逢坂の関は遠くは外社会であり、東国は鄙であり、さらにその「道の奥」となると風俗も異なる蛮陬の地である。それが首都圏の「地方」を見る眼であった。みちのくの彼方はもう、化外であり異類の世界と思

僧は「思ひがけないことを聞くが、言葉だけでは合点されまい」と云ふと、亡者は「実にたしかなるしるしがなくては、死ぬ間際まで此の尉が、身につけていた麻衣の袖を解いて」と、水衣の左の袖を縫い目から引剥して、これをしるしに届けてくれと僧に渡す。

今日のシテ亡者は、揚幕の前から二ノ松位迄しか進まず。ワキ僧がその片袖を受取って、ふしぎな事に出会った風で、別れて、舞台の方に引返す。亡者は、僧が奥州に下るので、ジッと見送ってから、揚幕に引込んだ。

鳥頭は、一般には「善知鳥」と書かれ「鳥頭とも書く」と記しているようである。青森県津軽の外ガ浜から蝦夷地といわれた北方海洋の孤島に生息していたウミスズメ科の海鳥で、鶉とは別である。ハトぐらいの大きさで、背面は灰黒色、顔には二条の白毛を垂れる。餌を水中に追い、一瞬にしてサッと空に返す。

『安斎隨筆』（伊勢貞丈著）や『奥羽観蹟聞老志』（佐久間洞巖著）などに拠ると、細長い首に嘴と脚が黄色で、母

われて、外ガ浜は、つまり「卒土の浜」を意味していた。

中入りになって、狂言の在所の者が、彼の猟師は、親鳥の啼声を上手に真似て親に化けては子を捕へ、子の啼声を上手に真似て子に化けては、親鳥を捕へ、こればかりで営業をしていたものだと言った。

僧は、未亡人に面会して、亡者の言伝てと、しるしの片袖の事を告げる。「是は夢かやあさましや……」と謡嘆く。

ワキ僧は、弔ひの手向けの笠を、舞台の中程より少し先へ出して置いた。その笠はひどく古びた、黒漆に赤い蛇の目の塗の、茲の寺の笠。

揚幕が上り、後シテ猟師の亡者が現れた。黒頭に蛙ノ面、白縷水衣無地髪斗目、腰みの、扇帯にさし、杖つく。すごい蛙といふ面で、両眼から眼指しがほとばしって出る。きつい気魄。眼指しは舞台の方の笠を狙ふ。亡者は古歌を謡ひ、舞台に出て、鳥獣を殺した罪科にて地獄におちた述懐を謡ふ。迷ひ歩きながら、手向けの笠の方は忘れない。笠に心をおいているよう

で。中程に坐し、笠に向ひ杖を膝に、熟と聴いて、追懐する。私は此の曲は笠が幽明の中継ぎして、笠が暗示の役目だと見た。

シテのはげしいうごき、ウトウヤスカタの鳥を捕へる所作。さつきから心を注いでいた笠は、こんどは鳥に見えて、追かけ、橋掛に行き、一ノ松に潜み「ウトウ」と、親鳥に化けて、笠を狙って舞台に出てきては、杖振り上げ笠を鞭打ち、子を捕へ、杖は捨て笠は手に持ち、親鳥の空中に啼騒ぐのを見上げ、「親は空にて血の涙を、降らせばぬれじと蓑笠や……」と、逃げ迷ひ、切羽詰って、遂に笠を捨てる。腰から扇をぬいて手に持ち、怪鳥が罪人を追立てる姿で、扇振り上げて二度打ち、また、我が眼を引き抜かれる形や、猛火のけむりにむせんで扇を抜いて顔を蔽ひすぐ放し、扇で鳥の羽ばたきもして、逃げられずに、安坐してしまふ。「うとうは却って鷹となり、我は雉とぞなりたりける」と、ワキ僧の方を見て立って、空を仰ぎ扇で地を指し、「安き隙なき、身の苦しみを、助けてたべや御僧」と合掌し舞収めても気をゆるめず、静かに揚幕に入った。

## 親と、子と、家族

菅原光中

今夏の日照りと熱さは日本列島を隅なく見舞った。人々は天を仰ぎ、古き呪い事の雨請いなどをして慈雨を待つ。自然は人間に謙虚の不足を諭すかの如く手厳しい。万物の霊鳥も生類においては弱き虫と諦め大自然の運行に敬虔なる祈りを捧げ、せめてもの豊作に感謝を致すべきかも知れない。

向井千秋さんは「宇宙から見た日本列島は夜明けを迎える時、金色に染まっていく。日いずる国とはこんなところかな、と思いました」と感想をのべ、「宇宙の星の中で、雲のベールに覆われた荘厳な地球を実感しました」と語っています。

この地球上で私共の祖先は、三〇〇万年、あるいは四四〇万年もの永い間、種を絶やすことなく、自然の陶汰と環境に適応する術を積み重ね乍ら今日まで生命を遺してくれました。ところで、この荘厳なる地球の島国の片隅で少し

時雨のあとの西日が、舞台のシテ柱の傍まで射しこんでいた。

あの日、東京から来た作家の滝井孝作は、正面席の僧正さんの隣に座った、と書いている。そこから見たままを、高い観察度と深い味わいをもってここに描写している。これが後に単行本となって、わたしもはじめて目に触れたわけ、それからでも、もう三十年近くになるう。淡々と現実を描写する作風は、生涯つきあう一冊になると思う。

ただ、私のなかでは、徳ンさんの口真似た話がこの短編に従って蘇ってくる。あの節縛れた大きな手も前シテの獬師にダブってくるのである。もしかしたら徳ンさんは、はじめにお能というものを見て、自分自身も気づかなかつたに違いないが、人間の免れがたい「業」の様を、即そのまま自分のなかに収めてしまったのかも知れない。「堪能は神明仏陀の感応にも至る」と、まさにそれである。

(円乘院住職)

気になる異変がおきています。

人は親から授かった生命を、皆誰もが燃焼し尽くして次代へと送りたいものですが、現実には左に非らず、どうしても燃え遣しが出てしまいます。それにしても最初から燃えたくても火がつかない、折角燃え出したのに水をかけて消されては元も子もありません。

このところ、子ども達の登校拒否（不登校）や長期欠席がうなぎのぼりに増え、高校生の中途退学も一〇万人を超えるなど見逃せない現実があります。又、いじめや暴力、自殺、殺人、非行もいっこうに減らず親のみならず社会問題として頭のいたいところですよ。

これは一体どうしたことか、その原因については、それぞれの立場から調査がなされ、極度の緊張や不安、友人関係、家庭環境の急変などがあげられています。その中で私は、家族、つまり親にその因が多分にあることを見逃す訳にはいけません。人に生まれて初めての教師は親であり、家族であり、四〜五才頃の幼児期に既に一生の人格を形成する基礎が出来上がるとされていますから、この大切な時期に親や家族に何か問題でもあった場合、子どもにとつ



ては不幸というほかはありません。このところ年々、子どもの生長する環境について無関心あるいは真の意味での無理解な親が増えつつあるということです。

一例をあげれば夫婦の離婚ですが、厚生省の平成五年の調査では、一八八、三〇三組を数え、もちろん過去最高で、年々増加の傾向にあります。これも原因は多種多様で、一概には言えませんが、どうも夫婦の未熟さが目立っています。そして大かた家族の崩壊を来たすか、片親の寂しい家庭と変化してしまふのです。言うまでもなく一番の被害者は子どもで、哀れというしかありません。

「親がなくても子は育つ」という生きものの本来の自立、成長を促す力強い言葉もあるのですが、やはり子どもには愛情を栄養として育っていく大事な時期があることは言うまでもありません。「親の因果が子にうつり」という浪花節文句が差別を帯びた響きを持つとすれば、「親の行為が子どもに影響を及ぼす」ことは生物学的に当り前のことで、例えば、生れたばかりのカルガモが、親から離されてゾウガメを親として育つと、成長した時、ゾウガメに対して発情する、という実験もあるのだそうですが、やはり人間の

場合も、育てられる環境によって赤にも黄色にもなるとすれば、気になる異変も実はこのあたりが発生源ではないでしょうか。幼児期の一番の栄養は、一生の栄養は、親と一緒に苦楽を共にするとは、少々夫婦めいた言葉ですが、とにかく時間の許す限り何んでもいいから共同行為をしてつき合おう。山でよし川でよし、海でよし、花壇作り、買い物、スポーツ、宿題など、親と日常的に過ごすことが大切なのです。前述の非行や暴力をはじめ、問題を起こした子ども達の心情を聞いてみると、大切な時期に親の愛情を受けていないことが最も高い比率となっています。子どもが歪んでいるとすれば、そのモデルは親にあり家族にあるといわざるを得ません。

日本も本年五月二十二日、国連子ども権利条約を批准し、「児童はよい環境の中で育てられる」ようにと、親も家族もそして地域全体が真剣に取り組んでいくことになりました。国民は皆中産階級意識と言われますが、生活が豊かになるほどに心も豊かになって、父親は父親に成る様、母親は母親に成る様、そして、燃え出した子どもの可能性を踏みにじるこのない様に大切に育ててほしいと思います。



(大長寿院住職)

天から唾が落ちてきましたが、己れを棚に上げて期待するわけです。  
「親が拝めば子も拝む、拝む姿の美しさ」、大人達が山川草木をいたわり、子ども達と共に生きようとする心が表現された時、神仏が授けた子ども達の眼は一段と輝きを増すことでしょう。

一九九四年は国際家族年ということですが。

# 人生の節目の 観音めぐり取材行

小池 平和

一関・平泉地方に、元文二年（一七三七）、地元の二人の和尚によって設定された「西磐井三三観音札所」という巡礼コースがある。

このコースを今年五月から三カ月かけ丹念に回って歩いた。ふつうの巡礼だと五、六日間あれば十分なコースだが、私の場合はガイドブックづくりの取材が目的のため、ひとつひとつのお寺の由緒因縁を聞きながら、仕事のあいまを縫っての巡礼で、時間がかかったのはいたしかたない。

この取材は、友人の一関市の祥雲寺住職・千坂峠峰さんから「西磐井三三観音の巡礼コースをあらためて紹介し現代に復活したい。そのガイドブックをつくろうと思う。執筆を頼む」と依頼され、趣旨に共感して始めたものだ。

西国三三ヶ所、四国八八ヶ所、坂東三三ヶ所、秩父三四ヶ所。観音霊場めぐりについては、それまでのその程度の

知識しかなく、全国各地にいろいろなコースが設定され、磐井地方にも三三観音巡礼コースがあることなどまったく知らなかった。

聞けば、東北の一大聖地である中尊寺、毛越寺を含めた、ローカルとしては特異なコースであるにもかかわらず、明治維新後の排仏棄積などをきっかけに三十三ヶ所のうち十一カ所が廃寺となり、現在、コース自体、埋蔵文化財同然になってしまっているという。私も千坂さん同様「あらためて紹介することに、なんらかの意義があるのではないか」と思い、さっそく依頼を引き受けた次第だ。

「もし無量百万億の衆生ありて、もろもろの苦悩を受けんに、この観世音菩薩の名を一心に称えば、観世音菩薩はただちにその音を観じて皆解脱まがることを得せしめん。もしこの観世音菩薩の名を持つものあらば、たとえ大火に入るとも、火も焼くこと能あたわず、この菩薩の威神力によるなり」

法華経の『観世音菩薩普門品』の一節で、以前、あるお坊さんの講話で「観音さまはありとあらゆる姿に身を変えて衆生を救う。私のそばでなんだかんだ文句を言う妻も、テ

てが新鮮で驚きの連続だった。

新聞記者時代に訪れたお寺が大半だったが、今まではただ本堂などの外観をながめ、パンフレットのなうすっぺらな知識で、理解したと思いきんでいただけだったと悟るのに、そう時間はかからなかった。

お寺にはさまざまな人の生と死、苦悩と喜びが刻みこまれ、支配者と被支配者の権力構造の縮図が描かれている。まさに歴史の証人であるということも徐々にわかってきた。政治とか権力との関係でいうと、中尊寺、毛越寺はその象徴として言うまでもないが、一関市内のお寺のほとんどが、中世、近世の領主との居館とセット、あるいは城下町の都市構造と密接な形で組み込まれている。

そして、鎌倉幕府による奥州制覇、豊臣秀吉の奥州仕置、伊達政宗の領国経営、薩長政権による明治国家政策などによって確実に消長を繰り返してきたのだ。

そういうことがわかりかけたので、私はお寺を回るたびに、観音取材を時に離れて、周囲の居館跡、伝説の地なども実際に自分の足で確かめることにした。

というわけで、私の巡礼は歴史探訪の側面を持ち、この



レビばかり見て勉強しない子供も観音様の化身かも知れない。そう思うと、つまらぬ怒りや愚痴もすつとんで感謝の気持ちわく」ということを聞いて、観音信仰とまではいかないが、なるほどと感動したことがある。

私は今年四月、二十四年間勤めた新聞社を早期退職して個人事務所を開設し、著述と編集出版の仕事始めた。

その初仕事のひとつがこの磐井三三観音の取材で「いよいよ観音様がオレを試してきたな。節目に巡礼は願ってもない」と宿命的なものを感じた。

寺々を回り始め、聖観音、十一面観音、千手観音、馬頭観音とさまざまな観音様のお顔を拝し、それぞれの寺院の秘物、宝物、古文書なども親切に見せていただいた。すべ

三カ月間、大変勉強になった。

ただ、この間、やみくもに歴史の知識をつめこんでいたわけではない。すがすがしいお姿の聖観音、厳しい十一面観音、異様な馬頭観音、やさしい子安観音など、いろいろな観音様に対面し合掌するたびに、心洗われたりつき動かされたりし、合掌の指先、目を閉じた頭の先に、なにか真つ白な電流が走るような妙な感じになってきた。

いよいよ観音様が乗り移ってきたか、そう冗談まじりに友人に話したこともある。しかし、冗談とは言えない変化が私の心身の中にも生まれてきたことは事実だ。

それはともかく、観音霊場めぐりに着手して三カ月余、あとは一カ所の廃寺を残すのみとなった。この廃寺は一関市三関に明治維新前後まであった「放生（宝性）院」というお寺だが、古い地図で探しても近所の人に聞いても確実な所在地がわからない。

ついこの間は千坂さんと一緒に、近所のお年寄りの話を手がかりに付近の山中を二度にわたって歩いた。一度は背丈以上も生い茂ったヨシや熊笹をかき分け、両腕を傷だらけにしながらの探索だった。

最後の最後、最大の難関が待ち受けていたわけだが、前

もヨシ、後ろもヨシの八方ふさがりの中で、私はいつのもにか「念彼観音力」「念彼観音力」とつぶやいていた。

人間なんてちっぽけなものだ。自分で生きてきたと思っ  
ているが実は生かされてきたのだ、そう感じて自分でも思  
づかないうちにこのつぶやきが湧いて出てきたのだと思う。  
私の行はこの廃寺を特定し、残りの十本近くの原稿を書  
きあげるまで終わらないが、行の途中でよかったなと思  
うのは、さまざまな観音様とそれを守ってきた人たちとの出  
会い、そして寺の境内と行き帰りの路傍に咲く花々との出  
会いだった。

巡礼の途中からだが、私は野の花を見つけるたびに「今  
しかチャンスがない」と思ってカメラにおさめてきた。一  
期一会、めぐり来る同じ季節が何回あるか知らないが、「こ  
の瞬間を大切にしなければ」ということを花に教わった。  
これも観音様の功德かも知れない。南無観世音菩薩。

（総研究所所長）

## 清水 秀澄

（一老 観音院住職）

やまぼうし（やまぐわ） みずき科  
初夏に、枝先に花柄を出し、そ  
の先に一群の花をつける。平らに  
開いた四枚の総苞片は白色の大型  
で、一見花弁と見紛う。その中心  
に花弁四枚、雄しべ四に雌しべ一  
本をもつ。多数の小花が球状に集  
まって着く、球形の集合果である。  
七月頃、この集合果が紅熟すると  
食べられる。表面に種子を散らし  
ださまは、桑の実に似ている処か  
ら、別名を「やまぐわ」とも呼ば  
れるらしい。

日本名、「やまぼうし」は、丸  
い蕾の集りを坊主頭に、総苞を頭  
布に見たてたものらしいが、この  
平泉地方では「ヤマガン」と呼ん  
でいた。「やまぐわ」から訛った  
ものだろう。花の頃、遠くから樹

冠を見ると、緑濃いその葉に対比  
して誠に気高く美しい。真中が白  
く盛り上って山法師の白い笠の如  
く見え、また堅くて強いその枝は、  
行者の金剛杖ともなったことだろ  
う。大変堅いので、昔の人達は櫛  
材の代用として機械機や、木植そ  
の他農具の柄、そりや下駄の歯  
などに使用し珍重していた。

こんな使い方もあった。拙寺観  
音院本堂の南西側には三間半程の  
縁側がある。この雨戸の戸車が「や  
まがん」の堅木で出きいている。戸  
車といっても、この車は戸につい  
ているのではなく戸溝に取りつけ  
てある。車の中心部に径二センチ  
の穴が貫通し、これに適合した同  
材の心棒に依り、側はあるが底の  
ない戸溝に取り付けられている。

だから、嵐が来ても、雪が降り積  
っても戸溝に水の溜る心配はな  
い。車は、一間に十二個の割で取  
付けられている。

藤島玄治郎先生は、この戸車を  
御覧になって、昔の人の知恵であ  
る、始めて見たとお話だった。  
観音院本堂は新築以来二百年にな  
るのだから、戸車たちはその間ゴ  
トゴトと今日まで寺の歴史を運ん  
で来たのである。

## 関山植物誌〈1〉



(三老 大徳院住職)

## 蘭僧正の思い出

蘭實円大僧正が亡くなられて、明年は三十三回忌ですから、遠い昔のことになってしまいました。記憶もうすれて順序立て、申し上げることもできません。ただ、在りし日の師の御姿が、断片的に浮かんで消えていくようです。

たしか昭和二十年に、六十才になつたばかりで中尊寺貫首として晋山され、半年ばかりして私は貫首を戒師に利生院師と共に得度致しました。当山では普通十四才で得度するのですが、長兄の戦死によって二十一才での得度でした。最初から小僧ではなく大僧、その年まで坊さんの知識など全くありませんでしたから、戒師である貫首に一切面倒見ていただきました。

一山の先輩方からお話もあつ

て、帰山し当番者の一員に加えてもらいましたが、なにせ隔日勤務で日当制であり、時間はあるけど金はなしの時代が続いたわけですから。左様な御時勢でしたから、貫首様として報酬額は雀の涙程ではなかったでせうか。

寺も段々仕事の量が増えますが、当番制ですから、当番以外は自坊で畑仕事などに日を過ごすと屢々でした。

昭和二十五年に藤原四代学術調査が行われましたが、その実施についての打合せが一ヶ年位前から度々開かれ、一山住職が真剣な討論をする中にも貫首がおられました。また同年金色堂の屋根葺替工事、引続き経蔵の屋根葺替工事が実施されましたが、貫首はう

れしさを満面にうかべられ、毎日の様に現場を視察されていました。引続き施行された収蔵庫建設工事や山内防火水道施設工事、そして中尊寺としては最も重要かつ予算の大きい金色堂復元工事には代表役員として、ともかくも実現に踏み出されたのであります。

普段、貫首の日課と申しますと、来客でもない限りは竹箒を持って参道を掃くか草むしりを楽しそうになさつて居られました。そのお姿を観光客が見て、当山の貫首と知って恐れ多い事だと話しているのが毎日の様に聴かれました。

僧正様はお酒が好きであられました。僧正様は酒が手に入りますが、当時は十分に酒が手に入りませんが、田舎酒で我慢願って居りましたが、次第に焼酎が出廻



つて参りまして、それを召し上げておられたような。日本酒が全くなかったわけではありませんが懐具合のためだったので。なにせ事務局としても報酬といえる程のものを差し上げられない経済事情でして、気の毒でなりませんでした。

遂には、群馬の御自坊の方より送金をしてもらい、しばらくぶりで日本酒をたしなんで居られる処へ、私達が押し掛けて行って、そ

の日本酒を横取りするようになり飲んでしまうことも一度や二度ではなかったのです。

子弟の教育にご熱心で、私をはじめ一山の雛僧を集め、よく講習会などを開かれました。その終ったあとは飲み会に変わりましたから、参加者も多かった様に記憶しています。

中尊寺の、戦後疲弊した時期に貫首となられ御不便を顧ず貧困に堪え、復興に尽された蘭僧正に対し御冥福を祈り、思い出しては、ただ／＼頭が下がるばかりであります。

「寿光心院大僧正実円大和尚」



(金剛院住職)

毎年ゴールデンウィークの五月四・五の両日、中尊寺では鎮守白山宮の祭礼が執り行われる。この祭礼は天下泰平・国家安穩・万民豊業を祈願するもので、中尊寺における法会・儀式の中でも特に重要なものの一つとして受け継がれてきている。

古くは四月初午・未の両日に行われたもので、白山社殿においてご本地供を修した後、御一ツ馬の行列、神楽、田楽、式三番、能と続けられたものであるが、今日では能舞台の上から法華経を誦したあと式三番と能だけが演じられている。

能は中尊寺が伊達家の庇護を受けたところから喜多流によって演じられているが、式三番の演目次第



については次の通りである。

【開口】(かいこう)

素絹(法衣)・輪袈裟・切袴を着用した笛が笛座につき、素絹を脱いで笛を吹き出す。

後見に先導されて、翁面の者が舞台中央に進み、所作を入れて次第に中腰になり、翁の型を整え「開口」の詞章を唱える。その内容はこの関山が四神具足、八徳円満の殊に勝れた霊地であることを称えるものであり、演者は詞章を唱え

ながら所作を交え、東西南北それぞれに向いて四方を賞でる。詞章の最後に楽屋より役席が「パッ」と高声を発する。これは「万歳楽」と楽屋より答えているものである。

【祝詞】(のっと)

囃子はなく、後見について直面の者が手に幣束を捧げて舞台に出、白山宮に向いて、何度か幣を頂きながら「祝詞」の詞章をそばにいても聞き取れないような微音で唱える。開口の詞章は関山の霊地を賛嘆したものであるが、この祝詞の詞章は白山の御神徳を称えている。終わると持って出た幣を舞台の端に置いたまま後見に次いで幕に入る。舞台に残された幣は、

## 中尊寺の延年



役席と言われる僧によって見所正面に立てられる。

【若女】(じゃくじょ)

笛、小鼓、大鼓が囃子座につき、やはり素絹を脱いで白衣に切袴の姿で居並ぶ。式三番での大小の鼓は能の場合とは違って床几を使わず、舞台の上に正座をする。大小によって神子拍子が打ち出されると、後見に導かれて若女の面をつけた者が舞台中央に出る。左手に

に鈴を振り上げ、あるいは振り下ろし舞台を三度回る。一回りするごとに舞台中央で笛に乗って拍子を踏む。



【老女】(らうじょ)

若女と同様に囃子方が居並ぶ。出は特に囃子もないが、祝詞役の者が老女の狩衣の上前を引いて登場する。途中橋掛かり中央付近で祝詞が跳ねると、老女も同じ所で跳ねる。シテ柱付近と正面先でも同じように跳ねる。舞台中央に老女を導くと、祝詞は引いてきた老女の狩衣を整え下がる。左手に扇を持ち右手に鈴を持って極端に腰をかがめ、大小の囃子に乗り四方答拜、踵踏みをする。四方終わって大地を掃き清めるような所作があり、また四方に跳ねる動きがある。最後に笛に乗って拍子踏みをし、後見が出てきて幕に引き入れる。



(宮城教育大学教授)

(前略)  
さて、歴史学徒の端くれとして、中尊寺様には普段にお世話になり、深謝しておりますが、此のたびは更に、御高著『中尊寺御遺体学術調査最終報告』を読ませていただきます。物凄い報告書であり、一頁をめくるたびに興奮し、全編を読み終えてまた大きな感動を押さえることができません。克明に記録された「調査日記」では、小職まで昭和二十五年の現場に居合わせたような臨場感に浸り、昭和三十年の最終報告書各篇玉稿では、既刊の報告書とかなり異なる部分のあることに吃驚し、埴原和郎先生の特別寄稿では、最新の科学的知見に基づきみごとな纏めともいえる御

見解に接し、心中で快哉しつつ、拝読いたしましたことでありました。千田孝信貫首様の巻頭言、佐々木邦世様の巻末解説にも、また蒙を啓いていただきました。「差当り部外発表を憚かる点も少ないのでその取り扱いについては十分な御注意をお願いしたい」と釘をさされるかたちで関係者にしか配布されなかったという謄写版刷本を、このように刊行されましたことに、深甚なる感謝の念を禁じ得ません。昭和三十四年十月、当時、東北大学助教教授だった高橋富雄先生に引率されて平泉に参上して以来、平泉の問題は、小生にも大きな位置を占めることになりました。それがいま、御高著『中尊寺御遺体

学術調査最終報告』に接し、新たに考察しなおさなければならぬ問題の所在に心底を突き上げられる思いであります。昭和三十年段階ではなく平成六年段階の公刊だからこそ思いだとも感じています。全くのカルチャーショックでした。おそらく御高著を拝読した総ての人が同様ではないかと愚察いたします。勤務先も夏休みがあげて講義が始まりましたので、早速に学生たちにも小職の此の思いを伝えつつ、新たに突き上げられる問題の所在についても、更に検討してゆきたいと念じています。

甲戌重陽

中尊寺様

(興千家茶道教授・宗貞)

涼やかな風に誘われて、風船葛が小さく首を振っています。暑かった夏を忘れさせる様に季節は少しずつ移ろいを見せて行きます。縁あって、「お寺の職員の方達に茶道の手解きを」という身に余るお話をお受けいたしましたのが六年前のことです。それからと言うものの、二月、三月と、雪間の草が芽吹きを始める頃まで、隣の町から浮きくんと通わせて戴くようになったのです。

この季節はお山の朝は一層清寂さを増し、人影も殆ど見当りません。そんな中で私は、まず、表参道・月見坂の登口傍の、大きなお地蔵様に手を合わせます。お寺様への報恩感謝の気持ちからです。参道には雄大な杉木立が長いトン

ネルを作って迎え入れてくれます。御本堂の左横には松寿庵という立派な茶室が在ります。向切の座敷の続きには立礼席もしつらえてあり、お客様に呈茶が出来る様になっております。お寺にお勤めの方々は、茶道を修得するために和気あいあいとした稽古風景の中にも、実に真摯な態度で打込んで行かれます。覚つか無い手で帛紗捌きをしていた初心者の方等も、二ヶ月もすると、立居振舞いまでなんとなく様に成り、一方、ペテランの方達の所作は増々堂に入って、無駄が無くなります。稽古の積み重ねが実に効果的であるということ、目の当りに実感する時でもあります。「一期一会を心に留めて暖かい

触れ合いが出来るようにいたしましょう」と語り合っていました。お人に接する時、この出会いが生涯ただ一度限りのことと捉えて、何方様にも誠意をもって務めさせて戴くことが大切なのだと思います。学ぶことが限り無く有ります。更なる前進のために、皆で精進して参りたいものと、白い季節の到来を楽しみにしております。

〈中屏 雪の月見坂〉



(読売新聞記者)

(前略)

御遺体調査以来実に半世紀近く、すでに多くの先生方が鬼籍に入られ、しかも、御遺体調査終了わずか六か月後に出版された概報というべき『中尊寺と藤原四代』の論説が権威ある「定説」として一人歩きしている現状下、「最終報告」の副題に万感の思いこもるのを感じます。

柳御所発掘に続く「炎立つ」放映で、一種「平泉ブーム」といべき現象が起き、それはそれでいいのですが、こんな沢山平泉研究家がいたかと思うほど書店に平泉関係書が並び、しかも、毒々しい色彩の表紙のものが多く、いささか苦々しく思っていた時期だけに、今回発刊された「最終報告」、

手にズッシリ重く、一服の清涼剤のようなさわやかさを覚えました。私ごとときおこがましい言い分ですが、これは平泉研究の基礎を築かれた先生方への鎮魂歌と言うべく、まことによいお仕事をなされ、遠く祝杯を捧げたいくらいの気持ちです。

がからむだけに特に重要な、いわゆる「右左壇」の問題について、最早これ以上の議論は無用でありましょう。

平泉への関心は片時も忘れることなく、これからも勉強を続けたいと思っております。

不二

学術的にはもちろんのこと、中尊寺一山にとっては信仰上の問題

一九九四年九月十一日



御遺体御遷座 (昭和25年)

風信 / 語録

公刊案内

『中尊寺御遺体学術調査』〈最終報告〉

●発行 中尊寺 ●限定六百部 ●平成六年七月十四日発行

公刊にあたって……………	中尊寺貫首 千田 孝信
最終報告書〔写真図版〕	
遺体に関する諸問題補考……………	長谷部 言人
藤原四代の血液型・指紋・足紋・毛髪・歯……………	古畑 種基
	岡島 道夫
	清水 正一
レントゲン学的にみた藤原四代……………	足澤 三之介
藤原四代遺体の微生物学的調査と	
その保存処理に就いて……………	大槻 虎男
中尊寺藤原遺体のミイラの成生について……………	森 八郎
	町田 百合
棺内遺品及び基衡、秀衡の錯誤について……………	毛利 登
理化学的調査……………	朝比奈 貞一

中尊寺金棺内の二、三の染色品残欠の植物染料について……………

林 孝三  
涼野 元

藤原四代遺体の保存処置に就いて……………

櫻井 高景  
鈴木 尚

藤原四代の遺体……………

鈴木 尚  
つだ さうきち

中尊寺のミイラについての諸問題……………

つだ さうきち  
森 嘉兵衛

中尊寺遺体の文献的考証……………

森 嘉兵衛  
朝日新聞文化事業団

〔解説〕

人類学からみた奥州藤原氏とエミシ…………… 埴原 和郎  
(付 中尊寺学術調査団名簿)

〔中尊寺刊行図書一覽〕

- 1 『中尊寺御遺体学術調査』〈最終報告書〉 平成六年七月
- 2 『中尊寺総合調査』〈第一次遺構確認調査報告書〉 平成六年三月
- 3 『中尊寺黄金秘宝展』奥州平泉文化の全貌 平成五年八月
- 4 『特別展「宝浄の世界」』 平成五年七月
- 5 『如是我聞』——多田厚隆大僧正講話 (東京・円頓会刊の改編) 平成四年五月
- 6 『国宝中尊寺金色堂 附旧組高欄・附古材保存修理工事報告書』 平成三年三月
- 7 『国宝中尊寺金色堂保存施設(新覆堂) 改修工事報告書』 平成二年四月
- 8 『法泉院小前沢坊庫裏保存修理工事報告書』 平成二年三月
- 9 『平泉』中尊寺・毛越寺の全容(藤島亥治郎監修) 昭和六年七月
- 10 『私の平泉』 昭和六年四月
- 11 『中尊寺史稿』 昭和五八年三月
- 12 『中尊寺』——発掘調査の記録—— 昭和五八年三月

- 『金字宝塔曼陀羅』(宮次男著) 昭和五年 吉川弘文館
- 『中尊寺』(藤島亥治郎監修) 昭和四六年三月 河出書房新社
- 『仏教芸術』72 ——中尊寺特集—— 昭和四四年一〇月 毎日新聞社
- 『東北文化研究室紀要6』平泉文化の研究 昭和三九年 東北大学文学部
- 『日本の美術9 平等院と中尊寺』(福山敏男著) 昭和三九年 平凡社
- 『中尊寺』(石田茂作監修) 昭和三四年 朝日新聞社
- 『奥州藤原史料』(東北大学東北文化研究会編) 昭和三四年 吉川弘文館
- 『中尊寺と藤原四代』——中尊寺学術調査報告』 昭和二五年八月 朝日新聞社
- 『中尊寺大鏡』(石田茂作監修) 昭和一六年 大塚巧藝社
- 『中尊寺大観』(斎藤隆三・柴田常恵編) 大正七年 精華社
- 『平泉志』(高平真藤編) 明治二一年一二月 願成就院

- 13 『古代秀衡碗の流れ』 昭和五五年六月
- 14 『中尊寺文化財総合調査』(一) 昭和五四年三月
- 15 『重要文化財大長寿院経蔵・願成就院宝塔・釈尊院五輪塔保存修理工事報告書』 昭和五三年一二月
- 16 『国宝中尊寺金色堂保存修理工事報告書』 昭和四三年七月
- 17 『中尊寺国宝・重要文化財防災施設工事報告書』 昭和三四年三月
- 18 『奥州平泉文書』(岩手県教育委員会編) 昭和三三年三月
- 19 『東北文化史講演集』 昭和二四年一月
- 20 『中尊寺総鑑』 大正一四年三月
- 21 『中尊寺案内誌』 明治二三年四月

〔中尊寺研究の文献と論説〕

- 『中尊寺金色堂と平安時代漆芸技術の研究』 平成二年一〇月 至文堂
- 『平泉町史』史料編一・二、総説・論説編 昭和六〇年 平泉町
- 『岩手の美術と文化』(板橋源監修) 昭和五九年六月 学習研究社

〔その他〕

- 『奥州藤原氏と柳之御所跡』(平泉文化研究会編) 平成四年四月
- 『中尊寺と毛越寺』(須藤弘敏・岩佐光晴共著) 平成一年一月 保育社
- 『経絵の美術』昭和六二年 高野山霊宝館
- 『古寺巡礼 中尊寺』(井上靖・多田厚隆ほか) 昭和五七年 淡交社
- 『北方の王者』平泉藤原氏(板橋源著) 昭和五〇年 秀英社
- 『平泉 中尊寺』(今東光著) 昭和四二年三月 淡交新社
- 『よみがえる秘宝 中尊寺金色堂』 昭和三九年 岩手日報社
- 『奥州藤原氏四代』人物叢書(高橋富雄著) 昭和三三年一二月 吉川弘文館
- 『岩波写真文庫78 平泉』 昭和二七年 岩波書店

〔近刊〕

- ※『平泉建築文化研究』(藤島亥治郎編著) 平成七年一月(予定) 吉川弘文館

# 執務日誌抄

平成六年

◇四月

- 一日 月次大般若会（本堂にて）  
一山事務局、職員辞令交付並びに事務引き継ぎ。
- 四日 新旧合同局議、引き継ぎ。
- 八日 仏生会（本堂にて）
- 九日 太宰府天満宮宮司高辻信良師来山、貫首挨拶。
- 十日 花まつり（郷土館で参加者六百名）。室性院（胆沢町）三十三年御開帳法要。貫首ほか一山法類隨喜。月例法話の会（講師 願成就院。）
- 十二日 資料館特別展出陳依頼のた

- め仙台市博・仙岳院へ出向（円乗院、金剛院）。
- 十六日 平成六年度中尊寺菊まつり協賛会総会。  
平成六年度天台宗陸奥教区議會。平成六年度陸奥仏青總會（毛越寺）。
- 二十三日 朝日新聞本社編集部長長谷川徹氏、学芸部長来山。
- 二十六日 二区老人会境内清掃奉仕。
- 二十九日 第十五回西行祭短歌大会催行。追善法要（本堂）。講師高野公彦氏（青山女子短大講師）。
- 三十日 神事能申し合わせ（能楽堂）。沖縄県副知事来山。

- 「」開幕。
- 二日 開山護摩供養（開山堂にて）。
- 三日 「源義経公東下り行列」午後三時金色堂着。
- 四日 式三番 神事能「嵐山」
- 五日 神事能「秀衡」 狂言「盆山」
- 六日 山王講（南谷山王堂にて）
- 八日 月例法話の会（講師 円乗院）。
- 十八日 貫首仮入山より一周年、諸堂参拝。
- 十九日 栃木県博友の会、百名来山。貫首法話、円乗院案内。
- 二十日 総代祖山参拝（慈覚大師生誕千二百年祖師讚迎法会、教区法要参加） 出発
- 二十一日 総代祖山参拝（慈覚大師生誕千二百年祖師讚迎法会、教区法要参加） 出発
- 二十二日 総代祖山参拝（慈覚大師生誕千二百年祖師讚迎法会、教区法要参加） 出発
- 二十三日 総代祖山参拝（慈覚大師生誕千二百年祖師讚迎法会、教区法要参加） 出発
- 二十四日 総代祖山参拝（慈覚大師生誕千二百年祖師讚迎法会、教区法要参加） 出発
- 二十五日 総代祖山参拝（慈覚大師生誕千二百年祖師讚迎法会、教区法要参加） 出発
- 二十六日 総代祖山参拝（慈覚大師生誕千二百年祖師讚迎法会、教区法要参加） 出発
- 二十七日 総代祖山参拝（慈覚大師生誕千二百年祖師讚迎法会、教区法要参加） 出発
- 二十八日 総代祖山参拝（慈覚大師生誕千二百年祖師讚迎法会、教区法要参加） 出発
- 二十九日 総代祖山参拝（慈覚大師生誕千二百年祖師讚迎法会、教区法要参加） 出発
- 三十日 総代祖山参拝（慈覚大師生誕千二百年祖師讚迎法会、教区法要参加） 出発
- 三十一日 総代祖山参拝（慈覚大師生誕千二百年祖師讚迎法会、教区法要参加） 出発

内。

- 二十八日 酒田三十六人集代参、池田氏来山。
- 二十九日 一山協議会（密壇新調等について）

◇六月

- 一日 月次大般若会  
貫首町内長部満福寺参拝、三老ほか同行。地藏院後住秀厚本日より事務局勤務。
- 四日 山家会（本堂にて）。月例法話の会（講師 地藏院）。中尊寺延年・式三番  
国立劇場出演、十名上京。
- 六日 駐日インドネシア大使来山、執事長案内。
- 十日 中尊寺杯町内ゲートボール大会。ドナルド・キーン氏、NHK「奥の細道を行く」撮影のため来山。
- 十一日 白山比咩神社一行来山。
- 十四日 三千院執事長、職員一行来

山。

- ◇五月
- 一日 春の藤原まつり開幕。藤原四代公追善法要（本堂）。稚児行列、金色堂法楽  
資料館にて特別展「みちのくの漆―伊達の調度と民芸

- 職員研修旅行一班（北海道東部、三十日） 出発。
- 二十九日 収蔵庫建設に関する一山意見交換会（講師・鈴木嘉吉先生）。
- 第三十三回全国芭蕉祭俳句大会（本堂にて追善法要、午後貫首講話「日光路の芭蕉」）。
- 三十一日 青山学院大教授浅井和春氏、金色堂・経蔵仏像調査のため来山。

◇七月

- 一日 月次大般若会  
陸奥教区寺院婦人会総会（大広間、二日、貫首講話）  
中尊寺前任職園実円大僧正墓参、遺弟地藏院ほか五名（群馬県下仁田常住寺）。
- 四日 平泉小学校六年生ふるさと学習（講師 円乗院）。
- 十六日 協賛仙台新能催行（仙台三

ノ丸跡にて)、貫首出向。

十七日 清衡公御月忌(本堂にて)『中尊寺御遺体学術調査』〔最終報告書〕刊行。一山配布。

国指定重要無形民俗文化財の指定を受けた衣川川西大念仏鬼剣舞に記念旗贈呈。月例話の会(講師 貫首)。菊まつり実行委員会(老分室)。青少年登山説明会(大広間)。

十八日 岩手日々新聞一面トップ『御遺体調査最終報告書』刊行の報道により、各方面からの取材、問い合わせ多く対応に追われる。テレビ「比叡の光」横山氏、施餓鬼会取材打ち合わせに来山。

二十四日 岩手県精神薄弱者福祉大会にて表彰される。

二十五日 金丸義一氏ほか助手十三名

境内遺跡予備調査、八月八日まで。

二十九日 貫首、県南町村議会議員会にて講演出向。

三十日 東文研三浦先生来山(金色堂空調調査)。

◇八月

一日 月次大般若会。部内自性院後住得度式(本堂にて、戒師貫首)。栃木円宗寺中里住職壇参一行来山。

二日 きんさん、ぎんさん来山(前日、東山町が招待)。

いわき市内郷高校教師生徒百名、徳姫ロード徒歩リレー出発祈願(本堂にて)。

四日 いわき市内郷青年会議所徳姫ロード徒歩リレー出発式(本堂にて道中安全祈願)。

県文化財愛護協合理事長挨拶来山(二十五周年記念事業)。

五日 『学術調査』〔最終報告書〕発刊記事、朝日全国版に掲載。注文問い合わせ殺到。

七日 結衆夏安居(開山堂にて十三日)。

十日 梵焼供(開山堂にて)浄土宗岩手教区代表、阿波之介舍利塚墓参。

十四日 第十八回中尊寺新能。能「巻絹」 狂言「釣針」能「是界」(白頭)

十六日 第三十回大文字まつり。望古台にて戦没者追善・先祖代々精霊供養法要の後、本堂にて大文字送り火採火法要。

十八日 落雷により山内被害甚大。金色堂空調コンピュータ他各所火災報知施設、電話器等故障。

二十三日 大施餓鬼会御逮夜

二十四日 大施餓鬼会。「慈覚大師生

誕千二百年慶讃曼供法要」新調密壇にて厳修。

二十七日 月例報告会

二十九日 柳之御所遺跡保存に伴う平泉バイパス変更について町説明会、執事長他出席。建設省東北地方建設局挨拶出向(執事長、円乗院)。

今市市老人会一行八十名来山。

三十一日 三老、山形県瀬見温泉例祭執行のため出向。

◇九月

一日 月次大般若会

二日 「岩手県文化財愛護協会創立二十五周年記念式典」で表彰(岩手県民会館にて)。

貫首記念講演。能「秀衡」協賛公演(シテ常住院高円)。

三日 泰衡公御月忌

貫首、第三回地域観光振興

セミナー記念講演出向。

平泉祭前年祭(四日、於観自在王院跡)。運輸省荒井観光部長来山。

五日 平泉祭出演(岐阜県石徹白一行ほか来山。文化庁主任調査官安原氏来山(境内遺跡予備調査現場視察のため、円乗院応対)。

十日 貫首、紫波町五郎沼薬師神社例祭に出向。

十五日 紫波町蜂神社例祭、円乗院出向。

十九日 赤堂例祭。護摩供厳修。

二十三日 秋彼岸会 常行三昧厳修。

二十七日 いっくら国際文化交流会一行来山。

二十八日 善光寺大勧進石塚貫首来山。宇都宮・一関保護司会合同研修会(大広間にて)。

二十九日 全国民放大会一行来山。

来春までの恒例行事  
(月次大般若会常の如し)

◇十月

二日 慈眼会

二十日 菊まつり開幕(十一月十五日)。本堂にて開幕法要。

二十八日 秀衡公御月忌 「金曼供」

◇十一月

一日 秋の藤原まつり(三日)。

一日 藤原四代公追善法要。稚児行列。

二日 菊供養会

三日 能「枕慈童」 狂言「盆山」菊まつり写真コンテスト撮影会。

九日 福聚教会東日本研修会開催。(十一月日まで、於花巻温泉ホテル千秋閣)参加予定五〇〇名。

二十三日 天台会御逮夜

二十四日 天台会「御影供」

◇十二月

- 七日 薬師会
- 十四日 弥陀会
- 十七日 白山会
- 二十四日 文殊会
- 二十八日 恒例供餅つき
- 三十一日 総礼(午後三時)
- ◇一月
- 一日 晨朝 新年祈祷護摩供
- 十日半 修正会(釈迦供、本堂にて)
- 二十時 冬堂籠もり
- 二日 九時半 正月祈禱護摩供
- 十時 修正会
- 午後四時 謡初め
- 三日 九時半 正月祈禱護摩供
- 十時 修正会
- 十一時半 元三会

(慈恵供、本堂)

- 四日 十時 修正会
- 五日 十時 修正会
- 六日 十時 修正会
- 七日 十時 修正会
- 八日 十時 修正会
- 十四日 慈覚会「御影供」
- 二十六日 文化財防火訓練。

◇二月

- 三日 節分会。
- 十四日 涅槃会御速夜。
- 十五日 涅槃会。
- 上旬 大節分会豆まき
- ◇三月
- 十九日 基衡公御月忌。「胎曼供」
- 二十一日 春彼岸(十時、本堂にて) 法華三昧厳修。
- 二十四日 開山会(護摩供、開山堂)



大壇新調 賀儀御芳名録

今年、開山慈覚大師御生誕二〇〇年慶讃大法要を修行するにあたり、大壇を新調致しまして、去る八月二十四日、本堂において貫首千田孝信大阿闍梨のもとに金剛界曼陀羅供を厳修致しましたところ、法会に御参集の方々より、感銘ひとしおと賀儀をたまわりました。ここに、御芳名を掲して深甚の感謝の意を表する次第であります。(執事長 菅原光中)

檀徒総代長 佐々木 誠 様	同副総代長 千葉 清 様	総代 岩淵 照 様	総代 岩淵 汪 様	総代 岩淵 文 様	総代 小野寺 貢 様	総代 葛西 治 様	総代 葛西 文 様	総代 葛西 光 様	総代 佐々木 国 夫 様	総代 菅原 善 悦 様	総代 菅原 良 悦 様	総代 鈴木 嘉 助 様	総代 高橋 幸 夫 様	総代 千葉 勇 一 様	総代 三浦 六 男 様
(株)朝田建設 様	(有)泉商店 様	(有)一関信用金庫 様	(有)岩間商店 様	(株)川嶋印刷 様	(株)小岩金網 様	(有)コンカツ印刷 様	(有)泉橋庵 様	(有)銅盛飯金 様	(有)平泉観光写真社 様	(有)平泉電力工業所 様	(有)丸庄呉服店 様	(株)丸卓建設 様			

## 後記

▽寺報『関山』を創刊いたしました。年一回の刊行予定ですが、将来的には春秋の二回発刊できれば、と考えております。

▽本誌には、西村公朝師と加藤瑠璃子様特に御稿ご執筆いただきました。毎号二名の特別寄稿を予定しております。

▽史跡平泉、仏教の現在、家庭の身近なことどもを、中尊寺から発信して、みなさまと交信が密になればと期待しております。

(編集 佐々木邦世)

中尊寺〈寺報〉『関山』 創刊号

平成六年（一九九四）十月一日

発行 中尊寺

〒029-41 岩手県平泉町字衣関二〇二

編集 中尊寺教学研究所

印刷 川嶋印刷(株)



発行 中尊寺